

より充実したサービス提供へ

独自の付加価値を創出

トランスジェニックグループの安評センターは、4月に親会社であるトランスジェニックの純粋持株会社化に伴い、主力事業であるマウス関連事業（ジェノミクス事業）を手がけることになった。今回の事業譲渡を機に同社の動物実験技術を活用し、これまで以上に充実したサービスの提供を目指していく。ジェノミクス事業を統括する石川智夫氏は「従来から提供している試験サービスに遺伝子改変マウスをさらに組み込んで提供し、独自の付加価値試験サービスを創出していききたい」と意気込みを示す。



石川氏

安評センター

同グループは、昨年度から従来のCRO事業と増益を達成。営業利益に ついては、前年度の赤字から黒字転換した。「創薬支援事業」において、売上高は前年度比7億円増の35億円、営業利

また、試験受託に関しては、受注活動が低下した期間があったが、これまでの訪問面談からウェブ面談中心の営業活動への取り組みが定着してきたことを受け、受託数が順調に回復した。

会社化に伴い、同社のジェノミクス事業を譲り受けた。遺伝子改変マウス作製を中心とするジェノミクス事業は同社設立以来の主力事業であり、遺伝子改変技術事業のバイオニアとして2000年から20年以上にわたって企業やアカデミアの研究者に生物資源やサービスを提供してきた。

一方で、安評センターが得意とする受託試験に遺伝毒性試験が挙げられるが、その中でも特に「トランスジェニックマウスを用いる遺伝子突然変異試験」(TGR)は、国内外からの試験依頼が増加している。その背景には、試験を実施できるCROが少ないこと、被験物質の遺伝毒性の最終判断に用いられるケースが多くなったことが要因と考えられている。これまでグループ会社として生産・提供してきたトランスジェニックマウス(Muta mouse)を自社内で生産・供給できるようになり、TGR試験を一層スムーズに進めることができるという。アカデミアで開発された遺伝子改変マウスの病態モデルをライセンス導入することで、「APPOskトランスジェニックマウス」を用いたアルツハイマー病、「IL-33トランスジェニックマウス」を用いたアトピー性皮膚炎といった非臨床試験受託サービスも提供してきた。